

## AM-715 の耳鼻咽喉科領域における臨床的検討

杉 田 麟 也 ・ 河 村 正 三  
市 川 銀 一 郎 ・ 藤 巻 豊\*

目的：新しい化学療法剤 AM-715 の耳鼻咽喉科感染症に対する臨床効果を検討した。

方法：初診時に細菌検査，血液生化学検査などをおこない，AM-715 600 mg/日を分3で投与した。可能な限り毎日診察し自他覚所見を観察し臨床効果を判定した。効果判定は当科の基準に従った。細菌検査は検体を TCS プロスに保管し当日のうちに東京総合臨床検査センターでおこなった。

対象：順天堂大学耳鼻科，医療法人江東病院耳鼻科，越谷市立病院，東京労災病院，あそか病院を受診した患者である。

結果：① 臨床効果を検討しえたのは 78 例であった。78 例中の 78.2% は著効および有効であり，疾患別には急性中耳炎 100%，慢性中耳炎急性増悪 65.2%，扁桃炎 80% の有効率であった。

② 副作用は 3 例で認められ，浮動性メマイ感 2 例，嘔気および下痢 1 例であった。

③ 主な検出菌の最小発育阻止濃度 (MIC) を測定した。S. aureus は 0.1～1.56  $\mu\text{g/ml}$  で峰は 0.78

$\mu\text{g/ml}$  に，P. aeruginosa は 0.1～0.78  $\mu\text{g/ml}$  で峰は 0.1 と 0.2  $\mu\text{g/ml}$  であった。S. pyogenes は 0.39～6.25  $\mu\text{g/ml}$  に，S. pneumoniae は 6.25～12.5  $\mu\text{g/ml}$  であった。

考察：対象の 78% は有効症例で，満足しうる結果であった。症患別に検出菌種の MIC と臨床効果の関係をみても若干の相違は認められたが大むね良い相関を認めた。扁桃炎の A 群溶連菌に対する抗菌力にやや疑問が持たれた。

### 質 疑 応 答

岩沢 (札幌通信) AM-715 の臨床効果の有効率の差異は投与条件，殊に投与対象疾患の症状の程度，感染症の巣の病原菌の種類，混合感染，薬剤感受性の度合などで生じるものと推定される。

AM-715 はその抗菌力，吸収分布排泄などの基礎的検討成績と臨床治療成績の結果から，当科領域でかなり有用な抗菌治療剤として期待される (追加)。

## BLMA<sub>2</sub> の膜透過性に対するポリエン系 抗生物質の関与

小宮山荘太郎 ・ 牧島 和見 ・ 広戸 幾一郎†  
秋山 伸一 ・ 桑野 信彦††

ポリエン系抗生物質は，その化学構造上エン構造によつて特徴づけられている。酵母や真菌類以上の高等生物の主として分布するステロール成分と反応する数多くの種類のポリエン系抗生物質が開発されている。

私共は各種抗生物質や制癌剤とポリエン系抗生物質とを併用することにより，培養系の酵母・動物・人などの細胞に対する致死効果が相乗的に亢進することを観察している。

\* 順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学教室

† 九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室

†† 大分医科大学生化学教室

今回私共は、酵母とチャイニーズハムスター V79 細胞を用いてポリエン抗生剤と BLMA<sub>2</sub> の併用効果を観察した。その結果ヘキサエン以下のポリエン物質とは著明な併用効果がみられたがペンタエン以上の物質だと併用効果がみられないことが判明した。そこでポリエン系抗生剤を大ポリエン (Amphotericin B, Nystatin), 小ポリエン (Filipin, Pentamycin, Pimaricin) の2つのグループに分類した。

#### 質疑応答

坂井 (東海大) 培養細胞の Fibroblast は癌細胞由来のものに薬剤相乗効果が認められたのか? 正常の Fibroblast に対してはどうであったか?

小宮山 (九州大) どのような種類の細胞でも同様の傾向を示す。しかし、細胞間では異なる。

## 混合細菌叢の SEM 所見

佐藤 喜一\*

近時、耳鼻咽喉科感染症の領域にも混合感染症を思わせる細菌叢の検出が多くなっている。例えば慢性中耳炎の急性増悪症を経日的に細菌検査を試みると、ブ菌、溶連菌、インフルエンザ菌の他に緑膿菌が培養されていることに、しばしば気づくことがある。

これらの病態像を形態学的に確認する目的で *in vitro* の実験モデルを作成し、経口的に走査電顕 (SEM) にて観察したので報告した。

#### 材料および方法

チョコレート寒天培地に耳漏より分離したブドウ球菌、インフルエンザ菌、緑膿菌を同時混合培養し、24 時間後、2 日、3 日と経日的に SEM 観察用に培地をふくめて資料を作成した。なお初めの 24 時間は 37 °C で培養したが、その後は室温で保存した。

24 時間後に採取したサンプルではブ菌、イ菌、緑膿菌が明らかに混在している像がみられたが、とくに

イ菌は優勢を示し培地中のヒツジ赤血球の周囲に集まっている印象を得た。2 日目の標本ではイ菌よりも、ブ菌、緑膿菌が優勢を示している傾向にあり、とくに緑膿菌が目立ってきていた。イ菌は自己融解している像が所々にみられた。この傾向は 3 日目のサンプルにおいても類似していた。

#### 質疑応答

河村 (順天堂大) 慢性中耳炎の混合感染菌の統計学的観察から黄色ブ菌は緑膿菌の居る所へは入りこみにくい、緑膿菌は黄色ブ菌のいる所へもどンドン入ってゆくようであるという仮説を東日本感染症学会で報告したが、佐藤教授の実験結果と大体一致するようで非常に興味があつた (追加)。

佐藤 (金沢医大) 先生のお考えを証明致したく努力するつもりです。

## 点耳薬の作用動態—SEM 観察—

佐藤 喜一・山下 公一・市川 朝也\*\*

慢性中耳炎の患者に日常しばしば使用する点耳薬が、起炎菌に対して、どのように作用しているかの問

題を考えるのは興味深いことである。今回、慢性中耳炎の起炎菌のうち、ブドウ球菌、 $\beta$ -溶連菌、緑膿菌

\* 金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室

\*\* 金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室